

教育相談だより

2024. 3. 7 (No. 4)

発行：発達支援センター

センター的機能 支援状況

校外支援の状況についてお知らせします。本校センター的機能における、令和5年度の校外支援の実施件数は、のべ196件でした。以下に、その概要をお知らせします。

表1. 依頼者別相談件数と割合

依頼者等	就学前	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	子ども保育課	教育研究所	保護者	その他
件数(件)	39	130	7	0	0	4	6	0	10
割合(%)	20	66	4	0	0	2	3	5	6

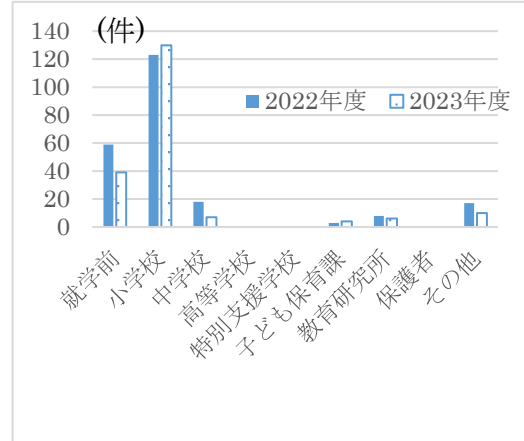


図1. 依頼者別相談件数

表2. 依頼内容別相談件数と割合

依頼内容等	訪問・巡回相談	来校相談	情報提供	研修会講師	物品貸出し	発達検査	その他
件数(件)	111	6	8	6	12	40	13
割合(%)	57	3	4	3	6	20	7

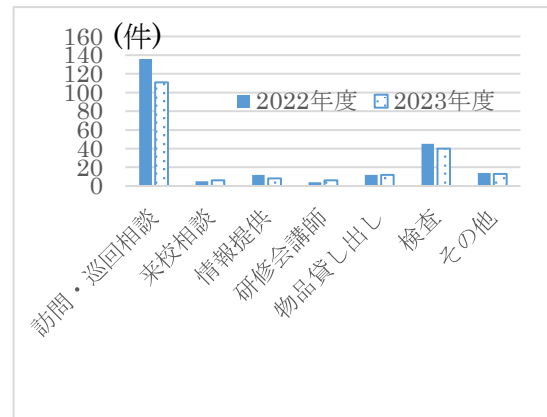


図2. 依頼内容別相談件数

依頼者別の相談件数では、小学校と就学前(幼稚園・保育所・認定こども園)を合わせると相談件数全体の約86%を占めています。昨年度に比べ、就学前と中学校の相談件数の割合は減りましたが、小学校の相談件数の割合が増え、小学校では1年生から6年生まで各学年にわたっての相談がありました。依頼内容別では、訪問相談・発達検査の依頼が多く、学校園や保護者が、子どもたちの困り感について実態を把握し、その特性に合わせた支援についての助言を求めているためと分析しています。相談内容は、学習面や行動面、不登校傾向のある児童への支援などいろいろなものがありました。相談後のアンケートでは、「支援方法を具体的に示していただいたので、教室ですぐ取り入れることができた。」「スモールステップで学習をできるようにし、できたらほめるように工夫した。」「得意なことをしているときに関わり、ほめるような関わりをしている。」などの意見をいただきました。今後も地域の学校園や子どもたちのために、よりよい助言ができるよう相談員の資質向上に努めたいと思っております。

鴨島病院連携事業

今年度、鴨島病院の理学療法士と作業療法士の専門家の先生にのべ6回来校していただき、児童生徒の体の動きや手指の操作などについて、助言をいただきました。教えていただいた内容に沿って、日々の生活や自立活動などで体の動きや手指の操作について意識して動かすことで、それが毎日積み重なり、数ヶ月で変化が見られることを実感しました。また、それぞれの動きを高めるためのトレーニング方法や適した道具についても教えていただくことができました。外部専門家の先生から学んだことをこれからの指導に活かしていきたいと思います。鴨島病院連携事業の報告会資料は本校ホームページにも掲載しますので、ご覧ください。

子育てのヒントコーナー

子どもへの不適切な関わりは、子どものこころを傷つけ、気になる行動となって表れます。親子のコミュニケーションを見直し、主体性や自尊感情を高めることができるようにしていきたいものです。

【積極的に使いたいコミュニケーション】

- ① 繰り返す…子どもが「みかんを描いた。」と言ったら、「ほんとだ。みかんを描いたんだね。」と繰り返す。
- ② 行動を言葉にする…子どもが食べ終わった皿を自分で片付けたときに、「お皿を片付けているんだね。」と言葉をかけることで、それがよい行動であると理解するようになる。
- ③ 具体的にほめる…何がよいのか子どもに分かるように、具体的にほめる。「あいさつできてえらいね。」

【避けるべきコミュニケーション】

- ① 命令や指示…子どもの行為に対して大人は「こんなふうにしてみたら？」と提案してしまうことがあるが、子どもは指示されたと感じ、主体性が損なわれるおそれがある。
- ② 不必要な質問…夢中になって考え事をしている子どもへ「何考えてるの？」といった質問をすることで、子どもの集中力を切ってしまう。
- ③ 禁止や否定の表現…「だめ。」「○○しないで。」などの禁止の表現はかえって否定的な行動を増やしてしまうことがある。

子どもが誤った行動を叱ってはいけないということではなく、子どもの気になるふるまいは、子どもから親への SOS と捉え対応を考えることが大切です。一人一人の発達のパースは異なっており、得意、不得意もあって当然です。不得意にだけ注目せず、どう対応するかが大切になってきます。発達や対応の仕方でお悩みの方は、担任や発達支援センターにご相談ください。

(参考文献:友田朋美「脳を傷つけない子育て」河出書房新社)